

発行日 2003年1月15日

発行人 藤川亨胤 編集責任者 浅井宣亮 編集委員 秋 太田 金子 菅原 舘盛 発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6 Tel.03-3361-0614 Fax.03-3361-0634 URL:http://www.soto-zen.net/

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.22



CONTENTS

●巻頭 多様な価値観を尊重しよう駒澤大学名誉教授 佐々木宏幹	1
●特集 曹洞宗国際交流会レポートSZI事務局 淺井 宣亮	2
●アメリカの仏教書 ミネアポリス禅センター創設者 片桐大忍老師の本ヴァレー禅堂 堂頭 藤田 一照	5
●海外レポート 日課行事 あるアメリカ曹洞禅僧侶の生活ミルウォーキー禅センター 主任 洞燃・サラ・オコナー	8
道元禅師750回大遠忌 旅行記ロサンゼルス禅宗寺 徒弟 ラング・ジョン・明心	1(
道元禅師七百五十回大遠忌ハワイ永平寺参拝団来日SZI事務局長 飯島 尚之	1
日本仏教ハワイ開教100年のターニング・ポイントSZI事務局長 元ハワイ別院開教師 飯島 尚之	
● S Z 会員寄稿 スリランカを旅するSZI会員 安東 玲子	13
お釈迦様に出会う旅SZI会員 古屋野路子	
●SZI通信 高祖道元禅師750回大遠忌奉賛焼香師拝登報告······	15
第3回夏期大学講座「禅といま」随喜報告	
動静報告	16
●寄付者・会費納入者名簿 ····································	16

巻頭

多様な価値観を尊重しよう

駒澤大学名誉教授 佐々木 宏幹



インドネシアのバリ島でテロがあり、多くの犠牲者が出て胸を痛めていたら、今度はロシアの首都のど真ん中でのテロ発生である。 イスラエルではユダヤ人とパレス

チナ人のテロとそれへの復讐の連鎖が切れることがない。 人間または民族はなぜかくも血で血を洗うような戦い を続けなければならないのか。

テロや戦争の原因や背景は複雑であるから、これを単純明快に論断することは不可能である。

とはいえ、各地の血なま臭い争斗の裏には相対立する 者同士の、利害を含む価値観の差異があるという事実 は、誰も否定できないのではないか。

昨年9月11日、アメリカはニューヨークで巨大テロが 生じたとき、建築家・東大教授の安藤忠雄は朝日新聞 にこう記した。「今回の事件は、米国のスタンダードの 押しつけによる経済至上主義や欧米文明と、非欧米文 明との衝突ではないか。『多様な価値観を認めよ』という叫びにもみえる。・・・・いま建築の世界でもこの米国流が世界を制覇している。世界には異なる文化、宗教、風土があるのだから、多様な建築があっていい。多様な価値を認め、受け入れるべきだと思う」(2001.10.9)世界のなかで力ある国や民族が、その価値観を力なき国や民族に一方的に押しつけるとき、何が生じるか。また異なる宗教を信奉する民族間で、互いにおのれの宗教の正当性を主張し、相手を服従させようとする際、何が結果されるか。結果は惨劇である。

われわれは人類史上に幾多のそうした惨劇の事実をみ てきた。

いまや、"お互いに相手の価値観や異なる文化、宗教を認め合う"というこの半ば常識化されている考え方を改めて認識しなおし、深く吟味し、主張すべきときではないか。それはおそらく"同事行"に連なる行為であるはずだから。

特集

曹洞宗国際交流会レポート

SZI事務局 淺井宣亮



9月15日、大本山永平寺において、宗務庁主催による曹洞宗国際交流会が開催され、SOTO禅インターナショナルも宗務庁からの依頼があり参加協力させていただきました。大遠忌行事の一環として9月15・16日の両日、南アメリカ総監部、ヨーロッパ国際布教総監部参拝団や北アメリカ総監部および禅宗寺、アメリカ各地の禅センターからの参拝団が本山に拝登し、焼香師を勤められたことに合わせて開催されたものであり、国際布教師、伝導教師、檀信徒、禅センターメンバーなど200人ほどの参加者が一堂に会しました。

本山吉祥閣2階の大講堂において午後6時30分より開催された交流会は、宗務庁総務部長森嶺雄老師の「大本山永平寺に、北アメリカ・ヨーロッパ各国の同心の徒が一堂に会することは素晴らしく、曹洞宗の一層の発展の契機になるものである。」という開会の挨拶に続き、南澤道人永平寺監院老師より「予修法要が世界各地において厳修されたのは、皆様の協力のおかげです。只管打坐の教えを噛みしめ、その教えによってより幸せになるように、このご縁を大切にして下さい。」と歓迎の挨拶がありました。そして大本山總持寺からも野田大燈後堂老師が参加され歓迎の挨拶を述べられました。



ついで英語版の「永平寺の一日」が上映され、海外からの参加者達に非常に好評を博していました。その後、北アメリカの秋葉玄吾国際布教総監より道元禅師に関する法話があり、またイタリアの泰天グワレスキー伝導教師、北アメリカの宗純ワイツマン伝道師より各地の宗教事情報告がなされました。質疑応答に入ると、会場から様々な質問が相次ぎ時間が足らないほどで、大変有意義な交流会に思えました。引き続き、奥村正博国際センター所長の指導による坐禅があり、永平寺での坐禅に参加者達は感銘を受けていた様子でした。

今回の国際交流会のお手伝いをさせていただき感じたことは、海外で布教活動を行っている人達にとって、高祖道元禅師の永平寺は特別な存在であるということでした。そしてその永平寺において焼香師を勤めるということは、非常に名誉なことであり、正統な道元禅継承者として永平寺からのお墨付きを頂いたということを意味します。

海外の禅センターでは「家」と結びついた檀家という制度は存在せず、メンバーは皆信徒です。そしてメンバーの流動性も高いため、禅センター指導者達は、法友であると同時にライバルでもあります。皆さん実力のある方ばかりであり、欧米らしく自由競争の風潮か強く、教師資格といった宗制上の取り決めにはあまり関心を持たない指導者も多いと思います。しかし、永平寺から焼香師に選ばれるということは、どの指導者にとっても非常に重要なことのような気がします。今回、焼香師に選ばれなかった有力な禅センター指導者の来日は少なかったように見受けられました。別に深い意味はなく、単に焼香師にならなかったから、また多忙だったから来日しなかっただけなのかもしれません。杞憂であると思いますが、焼香師選出の基準を明確にした方が、無用な摩擦を防げるのではないかとも感じました。





▼▼▼参加者インタビュー▼▼▼

*焼香師(9名)

*ブラジル 南米別院仏心寺 三好晃一師 「有り難く、深く感動した。」

*イタリア 普伝寺 泰天グワレスキー師

「世界には、日本語英語などの様々な言語があり、翻訳が難しいことがあります。しかし、道元禅師のお言葉は世界共通のものであると思います。今日私が焼香師を勤めるために法堂への階段を登っているとき、日本人の老僧とすれ違い互いに合掌低頭しました。このとき私は東と西が出会ったというような感動を覚えました。今回の大遠忌はお互いがより親しくなる革新的な契機になるのではないでしょうか。焼香師を勤めさせていただいたことは、私にとって非常に名誉なことでした。」

*ポルトガル 無畏城寺 道光トリエ師

「私がこの場にいる、ということの意味を考えさせられました。」

*ドイツ 普門寺 中川正寿師

「ドイツにいて23年たって、大遠忌に参加し焼香師を勤めさせていただける。大変感銘深いことと思っております。これを肝に銘じて、今後一層質の向上に努めたいと思います。今まで日本から御支援いただいて建物の方は大分整いました。これからは内容の方の立ち上げに努力したいと思っています。 今回は10名で参加しました。皆さんよく禅センターにいらっしゃるかたで、長い人は20年近くいらしています。短い人でも10年くらいです。

*アメリカ 好人庵禅堂・国際布教総監 秋葉玄吾師 「有り難いことです。」

*アメリカ 大円ベナージュ師

「これは、我々がより深く知り合うための出発点である と思います。」 ブラジル 南米別院仏心寺 三好晃一老師



*アメリカ ニューヨーク道真寺 大道ローリー師

「焼香師はまだしていないので感想は言えないが、このような交流会が開かれ永平寺で坐禅をし、互いの交流が密になることは素晴らしいことだと思います。」

(※南米、ヨーロッパの焼香師は9月15日交流会の前に 勤められましたが、北アメリカの焼香師は交流会の翌日 9月16日でした。)

*アメリカ 蒼龍寺 天真アンダーソン師

「またいつの日にか、戻ってきたいと思いました。」

*アメリカ 国際センター所長 奥村正博師

「あまり有り難くないことです。私には大役過ぎます。 申し訳ないです、僕みたいな者が永平寺に来て焼香師を させていただいて。まだ修行も未熟なのに恥ずかしいで す。」

掲載順は焼香師を勤められた順です

アメリカ バークレー禅センター 宗純ワイツマン師 (焼香侍者)

「大遠忌に際し、世界の曹洞宗が一つになって様々な 行事が行われたことは素晴らしいことだと思います。曹 洞宗の試金石になることではないでしょうか。」

アメリカ カリフォルニア・モンテベロー曹禅寺 倉井秀一師

「北アメリカからの60名ほどの参加者と一緒に大遠忌に参加できてとても幸せです。私も含めて素晴らしい精神的な契機になったと思います。」



アメリカ ミルウォーキー禅センター 洞然オコナー師

「非常に心を揺さぶられました。このように多くの海外のメンバーが永平寺に集まるのは初めてのことですから。」 (※今回の会報に寄稿されています。)

アメリカ アイオワ禅センター 瑞光レェディング師

「この交流会を契機にして、東と西の結びつきがより緊密になるような気がします。私の禅センターは20名ほどの小さなものですから、今回は1人で参加しました。」

日本 鈴木俊呉師

「師匠が来られれば、もっと皆さんと交流が深まってよかったのですが。」(※サンフランシスコ禅センター創立者である故鈴木俊隆師の法孫に当たる方です。)

アメリカ サンフランシスコ桑港寺メンバー

「素晴らしいことだと思い、もっと仏教や禅を勉強していかなければと思いました。|

アメリカ サンフランシスコ禅センターメンバー

「永平寺でみんなが一緒に静寂の中、坐禅が出来たことは良い思い出になりました。」

アメリカ オレゴン禅コミュニティーメンバー

「参加できてとても幸せです。 道元禅師の永平寺に参拝して、厳しい修行の力に触れることが出来たように思います。

写真掲載順不同



ポルトガル 無畏城寺 道光トリエ師



ドイツ 普門寺 中川正寿師



アメリカ 大円ベナージュ師



アメリカニューヨーク道真寺 大道ローリー師



アメリカ 蒼龍寺 天真アンダーソン師



アメリカ 国際センター所長 奥村正博師



アメリカバークレー禅センター 宗純ワイツマン師



アメリカ アイオワ禅センター 瑞光レェディング師



アメリカ 好人庵禅堂・国際布教総監 秋葉玄吾師



アメリカ カリフォルニア・モンテベロー曹禅寺 倉井秀一師



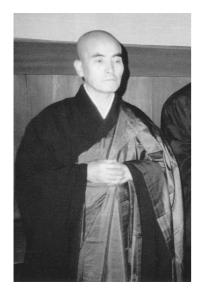
アメリカ ミルウォーキー禅センター 洞然オコナー師

アメリカの仏教書

第3回/禅仏教篇③

ミネアポリス禅センター創設者 片桐大忍老師の本

アメリカ マサチューセッツ州 ヴァレー禅堂 藤田 一 照



片桐大忍老師

これまで2回にわたってサンフランシスコ禅センターの創設者・鈴木俊隆老師の本について書かせていただきました。今回と次回ではミネアポリス禅センターを創設された片桐大忍老師(1928~1990)の本を紹介させていただきたいと思います。

鈴木老師がアメリカで暮らしたのは約12年間ほどでしたが、片桐老師は米国において40年間ちかくも曹洞禅の禅風を挙揚し続けた海外開教の大先達の一人です。わたしは鈴木老師とは直接お目にかかる機会をもつことができませんでしたが、幸い片桐老師とは三度ほどお会いするご縁をいただきました。そのことから書き始めましょう。

もう二十年ほども前のことになります。わたしが 兵庫県の紫竹林安泰寺に入山してまもなくの夏のある日、一人の禅僧がアメリカ人数人を連れて寺へやっ てきました。聞けばアメリカで禅センターを主宰し ている方だとのことで禅の修行道場の様子を実地に 見聞させるために弟子たちを連れてきたのだそうです。一緒に昼食をすませたあと茶礼の席が設けられ、 堂頭さんと彼らの話にわれわれ雲水も加えていただいていろいろ話をうかがうことができました。「アメリカの禅」といわれても、当時雲水になったばかりのわたしにはどこか遠い別世界の話のようで、「へぇー、 そうなんですか」といったほんの興味本位の聞き方しかできません。残念ながらその話の内容はまった く覚えていません。長い手足をはみ出させて作務衣や法衣を着ているアメリカ人たち(なかに若い女性が一人おられました)のぎこちない(?)たたずまいを見て、「似合ってないなあ」などと失礼なことを密かに思ったことは覚えているのですが・・・。ただ、まったく文化の土壌が違うところで育った知まれているそのお坊さんの苦労ぶりはそんなわたともある程度想像することができました。そのとがありませんでしたおい方相大忍老師との最初の出会いでした。で片桐老師に再会することになろうとは知る由もりませんでした。

1987年に師の命を受けてマサチューセッツ州にあ るヴァレー禅堂に赴任する途中で、わたしは片桐老 師のおられるミネソタ州ミネアポリスに5日間立ち寄 りました。実は師匠が一足早くそこに行き、日本か ら医学の研修に来ていた師の禅友の家に滞在してわ たしの到着を待っていてくださったのです。西も東 もわからないまま片道切符でアメリカにやってきて サバイバル生活を始めようとしている弟子をその道 の大先輩である片桐老師に引き合わせておこうとい う師の老婆親切だったのでしょう。師匠に連れられ て大きな湖のそばに立つミネアポリス禅センターを 訪ねました。数人のお弟子さんたちを交えて食事を いただきながら片桐老師から今後の生活のことにつ いていろいろなアドヴァイスをいただきました。お かげで「こういう方が後見役としていてここにいて くださるのなら、自分のような者でも何とかやって いけるだろう」という安堵感のようなものがこころ に涌いてきました。わたしがアメリカ人の禅修行者 たちと英語で禅について長時間語り合うという初体 験をしたのはこのミネアポリス禅センターの応接室 においてでした。それはいま思うとまことにたどた どしいものでしたが、英語でも自分の考えが彼らに なんとか通じ彼らの言わんとしている事が自分にも なんとなくわかるという「手応え」を実感できてと てもうれしく思ったものでした。そのとき撮った唯 一の写真をここに掲載しておきます。左側一番奥で わたしの師匠と話している方が片桐老師です。

三度目にお目にかかったのはヴァレー禅堂の近く に住んでいた日系二世の友人の家においてでした。 彼はかつてミネアポリスで片桐老師の指導をうけて 禅の修行をしたことがある人で、こちらに移ってき てからはヴァレー禅堂でわたしの先輩たちと坐禅を 続けていました。ところがわたしが来てからまもな く喉頭がんが発病し、手術とそれに続く苦しい闘病 生活を余儀なくされていました。「死ぬ前にどうして も片桐老師から戒を授かりたい」という彼の懇請を 受けて、老師は1989年1月に授戒式を行うべく弟子の アメリカ人尼僧を連れて彼の自宅に足を運ばれたの でした。わたしもその式に随喜させていただきまし たが、ベッドに寝たまま衰弱した体をやっとのこと で支えながら合掌し続けている彼の必死の思いと、 きびしい寒さの中を彼一人のために遠路わざわざこ こまで出向いてこられた老師の慈悲心の深さにここ ろ打たれ涙を禁じることができませんでした。(彼は それから4ヶ月ほどして亡くなり、生前に彼と筆談 で打ち合わせておいたやり方でわたしが葬儀をとり おこないました) その折の老師は顔色がすぐれずた いへんお疲れのようだったので心配申し上げると、 「大乗寺で開かれた伝道師研修所特別接心の主任講師 という重責を果たしたあとなのでまだ疲れが残って いるようです。そのときひいた風邪がまだ抜けない らしくあまり体調がよくないのですよ | とのことで した。「くれぐれもお大事に」とお見送りしたのです がそれが存命の老師をお見かけした最後になってし まいました。ミネソタに帰られてすぐ医学的な検査 をしたところ老師自身も非常にたちの悪いガンにお かされていることが判明し、抗がん剤による治療を 試みたのですがその効なく翌1990年3月に遷化された のです。

私事にわたる話が長くなってしまいましたが、こ こで片桐大忍老師の生涯を簡単に紹介しておきましょ う。老師は1928年大阪に生まれ、永平寺において橋 本恵光老師のもとで修行したあと、海外開教を志し て1963年にロサンゼルスの禅宗寺に開教師として赴 任されました。後にサンフランシスコの桑港寺およ びサンフランシスコ禅センターにおいて鈴木俊隆老 師の補佐をつとめられました。鈴木老師が遷化され た翌年の1972年にわずか5人の小さな禅グループの 招請をうけ、まだ禅が広まっていなかった中西部の ミネアポリスにおもむき貸しアパートの一室で禅セ ンターを開単しました。これがミネアポリス禅セン ターの始まりです。中西部を中心にして法筵を広げ、 鈴木老師亡き後の代表的曹洞禅指導者として多くの 人々に禅の道を説き示し、12人の嗣法の弟子を残さ れました。また、市内にある禅センター(願正寺) に加えて、アメリカにおける本格的な僧堂を建立す べくミネソタ州南部に広大な土地を購入し宝鏡寺と



ミネアポリス禅センターにて

名付け伽藍の建設を始めましたが完成を待たず1990 年3月に遷化されたのです。

老師がアメリカ人の弟子を相手に語った講話をもとにしてRETURNING TO SILENCE: ZENPRACTICE IN DAILY LIFE (Shambhara) (『沈黙に帰る-日常生活における禅の修行』) と題された書物が1988年に出版されました。鈴木老師のZEN MIND BEGINNER'S MINDが出てから約20年たってよ

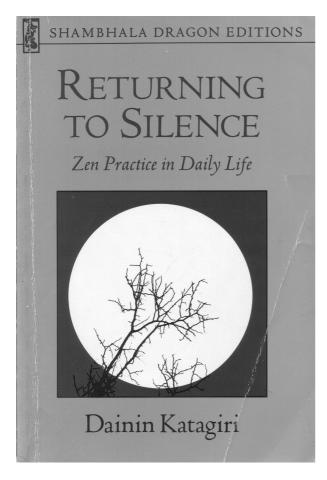
BEGINNER'S MINDが出てから約20年たってようやく出てきた「曹洞禅の伝統に立つ禅修行の指導書」として歓迎されました。いまでは数ヶ国語に翻訳されて英語圏外でも広く読まれているそうです。

本書は四部からなり第一部「日常生活における禅 (Zen in Daily Life)」では坐禅が目的達成の単なる 手段ではなく悟りそのものの活動であること(証上 の修)が強調され「悟りをあてにするな。ただ坐れ (Don't expect enlightenment-just sit down!) \(\) \(\) 獅子吼されています。日々繰り返されていくあたり まえの生活、その即今当処で悟りをどう具現してい くかが大切で、それには「只管(just)」という態度、 すなわち一瞬一瞬を一意専心(wholeheartedly)に 生き切る努力を精進することだというのです。第二 部「仏道に入る (Entrance into the Buddha Way)」 では懺悔、三帰依、受戒にかかわる諸問題、第三部 「仏教における信心と修行(Buddhist Faith and Practice)」では正しい坐禅、正しい信心、正師とはどう いうものなのかをめぐる諸問題が参究され、第四部 では『正法眼蔵 菩提薩捶四摂法』についての解説 がなされています。

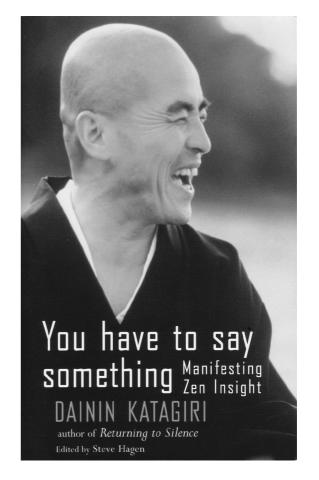
この本の出版から十年たってあらたに師の提唱を まとめた2冊目の本YOU HAVE TO SAY SOME-THING: MANIFESTING ZEN INSIGHT (Shambhara) (『なにかを語らなければならない-禅の英 知を具現する』) が1998年に刊行されました。題名に なっているのは「仏性とはなにか?生きるとはなに か?・・・いくら議論を重ねても結局観念をもてあ そぶことに終始するだけだ。だから禅においてはこ とさら言うべきことはなにもない。ただ沈黙(silenc e)あるのみ。この沈黙こそが仏性であり如であり空 なのだ。しかし禅は同時に百尺竿頭進一歩、その沈 黙から一歩出て『なにかを語らなければならない』 とわれわれに迫る」と語る短い講話の一節です。

本書は第一部「平安と調和(Peace and Harmony)」第二部「無我(Egolessness)」、第三部「なにかを語らなければならない(You Have To SAY Something)」という三部からなりたっています。最初の本と同様、一見ナンセンスと矛盾に満ち理解に苦しむような禅の教え(たとえば「沈黙を離れないでしかも話神の教え(たとえば「沈黙を離れないでしかもある。とか「こころを集中しつつしかもなにものからも自由であれ」とか「仏教の風は大地が黄金であることを具現させる」・・・)を綿密な語り口で提示し、読者を深い洞察へといざなっている好著です。ある読者は「決して読みやすい英語ではないが,不思議に惹きつけられる。読み返すたびに新しい発見がある」と言っています。

われわれは、その怠慢のゆえに曹洞禅が現代という時代に対して秘めている可能性をまだ充分に開花・現成させていないとわたしは思っています。それでは「宝のもちぐされ」ですし道元禅師の門下生としては「責任放棄」であり「契約不履行」ではないでしょうか。鈴木老師も片桐老師もアメリカという彼らにとっては異文化の中でその可能性を信じつつ試行錯誤を続けたのでした。彼らの貴重な苦闘はわたしたちに何を教えているのでしょうか?



RETURNING TO SILENCE



YOU HAVE TO SAY SOMETHING

海外レポート①

日課行事 あるアメリカ曹洞禅僧侶の生活

ミルウォーキー禅センター 主任 **洞燃・サラ・オコナー**

私はSOTO禅インターナショナルより原稿を依頼されたとき、承知はしましたが、実はあまり気が進みませんでした。その理由は、アメリカには様々な曹洞禅の修行スタイルがあるからです。小さなセンターから、大きな僧堂を備えたところまであります。だから、私の生活がアメリカの禅僧の代表的なものということは、難しいと思います。本当にどのように定義したらよいのでしょうか。

しかし、昨日の夜、私は地域のキリスト教教会で話をしました。その教会では世界の宗教に関する講演会を定期的に開催しています。そこでは、質問が矢継ぎ早に飛んできました。

- Q. 仏陀とキリスト教の神はどのような関係にある のですか?
- A. 関係ありません
- Q. 超越した存在というものを信じていますか?
- A. いいえ
- Q. 死後の世界はどうなっているのですか?
- A. 常に起きている生死の複雑な現れ
- Q. そういう服装(作務衣)をいつも着ているので すか?
- A. はい
- Q. 仲間が集まったときには何をするのですか?
- A. 坐禅·読経·勉強会

これらの質問はみんな、私が"仏陀の生涯、四諦、無常、相互依存、縁起、無我、そして簡単な仏教発展の歴史"などについて話した後になされたものです。私は、自分の生活を説明することの意味を考えてみました。

まず第一に読者の方は解っていただきたいことは、アメリカの曹洞禅の僧侶には、説明しなければならないことがたくさんあるということです。アメリカ社会に対しても、日本曹洞宗に対してもです。アメリカ社会は大部分がキリスト教徒であり、仏陀の教えには疎いのが一般的です。また、日本側は、我々アメリカ人が本当に曹洞禅を理解できるものなのかという疑問を持っています。特に、我々の修行の形態が日本の修行様式から変化しているのでなおさらです。

当然、我々は禅に興味を抱き禅センターを訪れる人々にも説明します。そういった人達のために、坐禅の組み方や禅堂でのエチケット、只管打坐の意味などを紹介するクラスを設けています。そこでは、般若心経の解説やそれを日々読誦する意義なども説明されます。また、禅は自己改善のためにするのではないということや、もちろん、神概念は持っていないが仏教は単なる哲学ではなく宗教であることも説明します。そして、我々の装束、髪形(剃髪はしていませんが、数センチといったとても短い髪形をしています。)

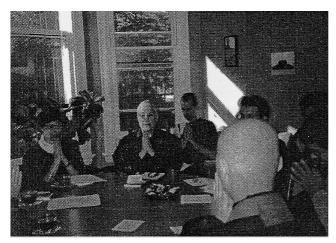
私達は真摯な修行を維持しようと努めています。 ほとんどのアメリカの禅センターにおいて主な焦点 は、在家信者の修行に当たっています。我々のサン ガのメンバーが興味をしめすのは、坐禅を直接体験 すること、応量器を使い偈文を唱える食事、教典や 仏教書の真摯な学習に対してです。

すなわち、日本では仏教修行の要素は、それだけ ということではありませんが、主に修行道場におけ る僧堂生活に限られています。一方、アメリカの在 家修行者は、禅を修行する個人的な機会に魅力を感 じています。

にもかかわらず、彼らの大部分は正式に授戒して 仏教徒になろうとは思いません。あるメンバーは何 年も厳しい修行を続けていますが、自分が仏教徒で あると思ってはいません。



ミルウォーキー禅センター



勉強会の様子

それでは話を「どんな毎日を送っているのか?」 ということに戻したいと思います。代表的な一週間 を見てみましょう。

月曜は禅センターはお休みです。しかし、私は車で北へ100マイル(160キロ)走り、"グリーン・ベイ刑務所"へ行き、19名の服役者からなる刑務所サンガにおいて一時間の坐禅・経行・提唱を行います。それに引き続いて、午後には牧師の訪問があります。

火曜日も月曜日とほとんど同様です。レッドグラニット刑務所へ車を走らせます。これは北西に115マイル(184キロ)行ったところにあります。

水・木・金曜日、センターは開いています。午前6 寺15分より40分間の坐禅を2炷行い、引き続き般若 心経を唱えます。夜は午後6時30分から8時にかけて、 40分間の坐禅が2炷あります。日中はサンガのメン バーの個人的な話を聞いたりします。少し変な感じ がしますが、国の離れた場所に郵送するため、永平 寺の零陵香を包装することもあります。刑務所サン ガの50人とよく文通しているので、十数通の手紙を 書いたりもします。会報の記事を執筆することもあ りますし、一群郵送のため印刷された会報にラベル を貼ったり縛ったりもします。土曜日の勉強会の準 備もします。提唱しますので、準備が必要です。ま た一方で、センターの本の管理や、祭壇の華燭や炭 を点検したりもします。数週間に一度は食事の計画 もしなければなりません。在家のメンバーと同様に、 私にも土曜日の食事を担当する典座の配役が回って くるからです。

土曜日の朝は、通常の坐禅と般若心経を唱えた後、応量器を使用し偈文を唱える如法の食事を採ります。次に、少し作務をした後、1時間の勉強会で朝のスケジュールは終了します。勉強会では、互いに教材を読んだり議論したりします。現在、澤木老師の『証道歌を語る』の英訳本(仏訳本を筆者が英訳したもの)を勉強しています。これが終わったら、維摩経を勉強してみたいと思っています。

日曜日は大体休みになっていますが、たまに午後に隣の街まで出かけてそこにある小さな禅グループと坐禅をして、提唱したりします。ときどき175マイル(280キロ)も走り、州の西部へ行き、特別警備されている刑務所の独房に入れられている人達に会いに行ったりもします。

また、10月から6月にかけての第3週末には、2日間の摂心を行います。土曜日には11炷の坐禅と提唱、3度の応量器による食事、日曜日には8炷の坐禅と提唱、2度の応量器による食事を行います。

この他には…学校や大学、教会での禅に関する講演。仏教徒平和協会やミルウォーキー宗教交流協会の会議。そして個人的な研鑽。現在、道元の著作をすべてカバーしている数少ない、西島/クロス翻訳の『正法眼蔵』を読み進めています。私は多分、これまでに他の素晴らしい翻訳で『正法眼蔵』の70%は読んでいたと思います。しかし、道元禅師の著作を年代順にすべて読むということは、魅力的で私を元気づけてくれます。

以上が、常に質問に答える用意をしており、いつでも受け入れ、絶えず自分自身の修行と理解に対して疑問を投げかけている…ひとりのアメリカ人曹洞宗僧侶の一週間の生活です。

(訳:浅井宣亮)



禅センターのメンバー達

海外レポート②

道元禅師750回大遠忌 旅行記 ~ロサンゼルス禅宗寺より~

ロサンゼルス禅宗寺 徒弟 ラング・ジョン・明心



永平寺にて

この旅行は、道元禅師の750回忌に敬意を表する「巡礼」の旅でした。「巡礼」の歴史的本質は長い時間の霧の中に見失われていますが、実際には参加者にとってとても意義深く大切なものとなりました。みんながこの旅を通して五官をとおして楽しんだり喜んだりしながら五十年に一度の歴史的瞬間に立ちあうことで、過去をひもとき、将来を見据える事を感化する機縁となったように思います。

9月15日、僅か一泊でしたが、永平寺に世界中から多くの人が集い、同じ屋根の下に泊りました。私たち一行も永平寺へ着くと最初に部屋に案内され、夕食を食べた後、大講堂へ全員が集いました。国際交流会です。世界中から多くの人が集まって来ています。また日本国内からは英語が話せるお坊さんが助けに駆け付けてこられ、その中には懐かしい顔も沢山ありました。曹洞禅ワールドの色々な部門からのお話を聞いた後、最近作られた永平寺についての映画が上映されたました。

こういうご縁はとても大切です。話された言葉、または翌日行われた儀式だけではなく、道元禅師を師と仰ぐ世界中のサンガが一同に集まるという事実に深い意義を感じました。世界四大陸から集まった道元禅師の信奉者の渦の中で、禅師の偉大な智恵にたいする私の想いは、感謝を超えて、更に深い尊崇の念に変わりました。

永平寺での最後の日、私たちは午前三時半に、同じ場所で800年来、修行僧が毎日続けてきた振鈴で目を覚ましました。参加者は副監院老師の日本語での法話を拝聴し、朝課に参列しました。秋葉総監が焼香師を務められた早辰誦経が終わって、102才の宮崎禅師様より海外よりの参加者一同に直接お話を賜りました。早い朝食を済ませると直ぐに出発の準備にとりかかることに

なりました。

私としてはもう少し永平寺で他の海外から来たグループと交流するための時間、またこの素晴らしい機会の余韻を楽しみ意義を反芻する時間が欲しかったのですが、旅程のためやむをえません。後ろ髪を引かれる思いで永平寺を後にしました。

旅は続き、重要な歴史的寺院巡りがまた始りました。 永平寺に先立ち、ロスより関空に下り立って、京都で 朝を迎え、最初に訪れたのは美しい宇治の平等院でした。 ちょうど曹洞宗の最初のお寺、最初の目的地の興聖寺 への通り道でしたので、せっかくなら、ということで旅 程に入っていたのです。18世紀の浮世絵そのままの宇治 川べりを歩き、美しく歴史的な二つの寺院を見ることが できたのは、私にとってとても幸運なことでした。

さて、永平寺を後にした私たちは、近くの宝慶寺に向いました。道元禅師と中国でともに学び禅師を慕って日本へ渡ってこられた寂円様のお寺です。同じ外国人として道元禅師を慕う境遇に希望を伝える重要なお寺です。永平寺と比べると訪れる観光客も少なく、静かな山の中の修行寺で、20人の雲水がここで修行しています。人里はなれた山の中です。バスを降りてから長い杉木立の山道を登ってようやくたどり着くと、修行僧らが出迎えてくれました。その修行僧たちは見るからに品があり、寺院をとりまく情景も崇高に見えました。私はここの雰囲気が心地よく帰りたくないと思ったほどでした。帰り際に見せていただいた宝物館には曹洞宗の歴史的文化遺産がいっぱい詰まっていて、素晴らしいこの所蔵品の中には道元禅師ご真筆の書や有名な道元禅師の肖像画「月見の像」などが含まれていました。

午後は片山津の森本旅館でゆっくりと温泉に浸かり、 慣れない浴衣を着、大広間でお膳にのった美しく豪華で



永平寺の夜。筆者(左から二人目)

美味しい食事を食べ、永平寺での感想を交換しました。 秋葉総監のご兄弟や旧知の僧侶の方も合流し60名を超 す大宴会になりました。

楽しくはしゃいだ翌朝、一行44名は一路能登の總持寺祖院へと向いました。總持寺祖院は瑩山禅師のお寺。 小雨の中に佇む総持寺の苔の緑は、私が知っている緑の中で一番美しいと思いました。今まで参拝してきた一つ一つの寺院がまったく違う雰囲気をもち、人間の様にまったく違った印象を受ける事に驚きました。

金沢の大乗寺が旅程で最後のお寺となりました。このお寺は金沢の町の中にあり、修行道場として機能しています。興味深いのは修行道場でありながら一般の人や英語を話す人にも禅宗寺のように坐禅会として受け入れている点でした。

旅の締めくくりは風情がありとても気持ちの良い山中温泉。旅の終わりのお別れの晩餐。記念にみんな浴衣で集合写真を撮りました。翌朝、それぞれの故郷や観光、ロサンゼルスに帰る前の寄り道へと散って行きました。

あっという間の短い4泊6日、巡礼の旅が終わりました。 一日一日沢山のことがあり過ぎて、自分の目で実際に 目撃した強い衝撃の数々を自分の中でまだ消化できてい ません。しかし、時が経てば、このような巡礼の旅に出 た事によって私たちにもたらされた素晴らしい贈り物の 真価が十分に理解できると確証しています。

(訳:小島秀明師)



歴史を直に感じさせる日本の建物

道元禅師七百五十回大遠忌ハワイ永平寺参拝団来日

~2003年10月26日ハワイ開教100周年~

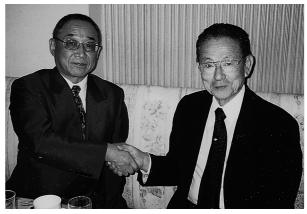
SZI事務局長 飯島 尚之

町田時保ハワイ国際布教総監老師ご夫妻とメンバー(ハワイの信徒)一行50名が道元禅師七百五十回大遠忌本山参拝の為、さる10月16日関西空港に到着、京都観光後、19日に永平寺、22日に總持寺を拝登、22日夜に東京品川プリンスホテルに宿泊し東京見学後24日に成田から帰国しました。

SZIは、元ハワイ開教師の方々、並びにご縁の深い方々にお声をかけ、歓迎の夕食会を22日に東京品川プリンスホテル・ブッフェレストラン・ハプナで開催、再会を懐かしむ楽しい一時を過ごしました。

来年(2003年)、ハワイは開教100周年を迎えます。夕食会で町田時保ハワイ国際布教総監老師は、ハワイ開教100周年の記念行事に日本から多くの方々にハワイに来て頂けるよう現在準備を進めていると日本側参加者に声をかけ、さらに元ハワイ開教師が会員でもあるSZIにも協力して頂きたいとの打診がありました。この夕食会がハワイ開教100周年に向けた相互協力の一歩にもなりました。

なお、ハワイ開教100周年慶賛法要は2003年10月26日ハワイ両大本山別院正法寺で修行、記念祝賀昼餐会等も企画中。詳細はSZI会報で追ってご案内申し上げます。



夕食会に駆け付けた駒澤大学大谷学長と 町田ハワイ国際布教総監

海外レポート③

日本仏教ハワイ開教100年のターニング・ポイント ハワイ開教100周年に向けて パート1

SZI事務局長 元ハワイ別院開教師 飯島 尚 之



曹洞宗両大本山ハワイ別院 正法寺全景

真珠湾攻撃を期に、"母国"と戦わねばならなかった 悲劇を体験したハワイの日系人たちは、"日本志向"を 捨て、日本語を意識的に使用することをやめ、ことさ ら"アメリカ人"となる努力を重ねてきました。しかし、 それによって、日本の思想や文化の伝統も急速に彼ら の生活様式や精神構造から欠落していきました。その 影響を最も深刻に受けることになったのは、移民と共 にハワイに渡り、移民と共に歩んできた日本仏教にほ かなりません。

人の移り住むところに、その移民の人々の宗教が広まるといわれます。私たち日本民族はヨーロッパ近代史に見る世界的大規模な移民史を、歴史上持ちません。そうした観点からすれば、ハワイの日系人社会が最も"進化"した日本人移民と言えましょう。

今日におけるハワイの日本仏教の基盤は、官約移民時代(1885年~1894年)の9年間から、呼び寄せ移民時代(1908年~1924年)の16年間に渡布した伝統宗派の各教団によってつくられました。当初、仏教の布教も、まず移民たちが配属されている砂糖耕地内の"キャンプ"と呼ばれる居住地から始まりました。この時期、寺院あるいは布教所は、耕地内のキャンプの"中心地"に当たるような場所を耕主から借り、信徒の寄付や奉仕により"手づくり"で建てられ、そこはやがて精神的なより処と「社交場」として重要な意味をもつようになりました。

寺院が耕主から支援された理由としては、移民の人々の耕地ストや労働争議の政治的行動抑制、労働力低下への歯止め等々、移民感情をコントロールのために寺院が利用された一面もあると伝えられています。

この中で行われる宗教行事は、全く日本の各寺院の行事・儀礼をそのまま移したもので、葬儀・年忌法要・祖先供養などがすべてでした。日本の寺院とは違った信仰の日常化と深化に役立った活動としては、キリスト教会の"日曜礼拝"にならって、日曜毎に信徒が寺に集まって読経し、聖歌を歌い、法話を聞くという"日曜聖集"を各寺院が実施したことが、日本仏教の今日存在できる大きな基盤を築き上げたのです。キリスト教的な"生者"との繋がりをとり入れた処に日本仏教の国際化が始まったと考えられます。

日本仏教がハワイ布教に着手してから100年の歴史を有するのに、その教化実績の実態は決して芳しいとはいえません。同じく100年の歴史を有するキリスト教の日本人移民に対するハワイ伝道と比較すれば、正に雲泥の差と言うべきです。日系人にしてキリスト教の牧師になるものがいるのに対し、日本仏教は何人の二世、三世の日系人僧侶を育てられたか、それを思うと寂しいかぎりです。ただし、ハワイでの日本人、日系人のキリスト教伝道の成功の裏には、日本の真珠湾攻撃に始まる第二次世界大戦が大きく影響しています。つまり、その大戦を境として、日系人の近代文明への憧れと、欧米思考、白人崇拝が大きく役立っている事実は見逃せません。

今、アメリカ社会の一部であるハワイにおいて展開されている日本仏教が遭遇している数々の問題点を忌憚なく直視することは、一面において今後の日本おける仏教には、極めて重要なことであろうかと思われます。何故ならば、現実のハワイにおける日本仏教が直面している諸問題は、ある面において、日本における仏教のありようについて、極めて示唆的かつ現実的な要素を多分に含んでおり、それはまさに、日本にとってハワイ寺院はアンテナ・ショップ的要素を持つと言って過言ではないからであります。



本堂内

SZI会員寄稿

『スリランカを旅する』

SZI会員 安東 玲子



花を捧げ手を合わせる女子学生たち。 ブッダガヤから運ばれた 樹齢2000年の菩提樹の前で。

首都のコロンボ へは直行便で約 9時間。常夏の 島です。抜けるよ うな青空が広がり、

太陽がじりじりと照りつけてきます。

かつて「セイロン島」と呼ばれたこの国は、北海道をひと回り小さくしたほどの大きさです。島中にバスの路線が走っていて、移動はとても便利です。町にはバスターミナルがあり、目的地行きのバスを見つけ乗り込めばOK。もちろん地元の人の重要な足でもあるので、いつも満員です。

スリランカの仏跡といえば中央部の「文化三角地帯」と呼ばれる地域が有名ですが、南部には大乗仏教遺跡が残っています。そのひとつブドゥルワーガラは、ジャングルで発見された磨崖仏。ウェッラワーヤからバスで10分、そこから森の小道を歩いていきます。30分ほどで道がひらけ、目の前に15mほどの岩壁に彫られた7体の仏像が現れました。とてもおだやかなお顔。帽子をとり手を合わせました。聞こえてくるのは鳥の声と風の音だけ。「何でこんなところに」と不思議になります。9世紀頃の作といわれていますが、当時の都からも遠く離れたこの地になぜ作られたのか、今も謎だそうです。

翌日、ウェッラワーヤでバスを待っていました。小さいながらも分岐の町なので、次々とバスが停まります。シンハラ語の読めない私に、おじさんがバスが来る度に「違うよ」「あれは各駅停車だ」などと声をかけてくれます。彼の仕事はバス待ちの客にビスケットやナッツなどを売ること。バスに詳しいはずです。「来たら呼んであげるから、お茶でも飲んでなよ」との言葉に甘え、目の前の店に入りました。

お茶を頼むと、ミルクと砂糖たっぷりの紅茶と、パンが盛られたお盆が運ばれてきました。好きなものを食べて、食べた分だけ払うシステムです。スリランカでは意外にもパンがよく食べられ、ジャムパンやコロッケパンなど種類も豊富でおいしいのです。

おじさんの呼び声で無事乗り込んだバスは、もちろん満席。約5時間の道のりです。すると前の席の少年が私に席を譲ってくれました。外国人だからでしょうか。バスに限らず、スリランカ人はとても親切。地元の人からホスピタリティあふれるもてなしをあちこちで受けました。

窓の外を眺めていると、後ろから肩をたたかれました。 見るとお坊さんが乗り込んできます。私の座ってる席は 運転席のすぐ後ろ。一番いい席です。私と隣に座ってい たおじさんは席を空けました。スリランカでは僧侶には もちろん、お年寄りや女性に席を譲ることは当然のこと で、とても自然な光景です。

その後滞在した町々では、寺院を訪ねて回りました。 本堂の内壁には派手な彩色の絵が描かれています。どれ もがお釈迦さまの名場面。お坊さんが絵を見ながらお話 をしてくれます。とてもわかりやすく、その様子が目に 見えるようです。人々はよくお寺を訪れます。特に満月 の日は休日となり、花や供物を持ってお参りに行きます。 また、日曜日には日曜学校が開かれ、子どもたちが仏教 のお話を聞きに集まります。こうやって子どもの頃から 仏教に親しんでいるのです。

今でも目を閉じると、目の前に広がる美しい海、緑豊かな風景と人々の明るい笑顔が浮かんできます。ゆったりとした時間の流れの中で、人々は仏教の教えとともにおだやかで心豊かな生活を営んでいます。「また来よう」と、帰りの飛行機の中で心に誓ったのでした。



小さなお寺で、まだ湯気の立つお供物が目に止まった。 赤米、野菜カレーとバナナがお香と供えられている。

SZI会員寄稿

お釈迦様に出会う旅

SZI会員 古屋 野路子



ポロンナルワの遺跡

一枚のはがきに導かれるようにして、いつのまにか スリランカへ行くことが決まりました。

六日間のツアーでしたが、最初と最後の二日間は飛行機の移動なので、スリランカに滞在した時間はわずか四日間でした。

その四日間で、スリランカ最古の都があったアヌラダプーラ、仏教伝来の聖地ミヒンターレ、美女のフレスコ画「シギリア・レディ」で有名なシギリア、スリランカ最大の仏教遺跡群ポロンナルワ、スリランカ最大の石窟寺院のあるダンブーラ、そしてシンハラ王朝最後の都で、スリランカを代表する仏教寺院「仏歯寺」のある古都キャンディなど、スリランカの主要な仏教聖地や名所をほとんど巡ることができました。

強い陽射し、青く澄んだ空、緑豊かな木々、鮮やかな色彩、モンスーンの風、スリランカは「光り輝く島」という名の通りの国でした。

スリランカの思い出は、色と風と光と共にあります。 訪れた場所にはどこでも、赤・白・青・黄・橙の五 色の旗がありました。これは仏旗であり、お釈迦様を 表していて、スリランカの仏教徒にとって大切なもの です。

色とりどりの旗や仏旗が菩提樹の枝で風に揺れていた 光景や、ゴールデンシャワーの黄色、紫の蓮、「仏陀 の花(ブッダフラワー)」と呼ばれるプルメリアの白、 赤やピンクなどの豊かな色彩の花が、青空の下で咲い ていた姿が目に焼き付いています。

ミヒンターレの岩山が夕焼けで染まり、スリランカで初めて見る夕日が傾いていく瞬間の美しさを忘れることはできません。

立っているのがやっとだった岩山の頂上の強風、シギリアロックを通り抜けた爽やかな風、菩提樹の下の

穏やかな風、スリランカでは、日本とは違う風が吹いていました。

満天の星の下で、生まれて初めて南十字星を見ました。南半球側でしか見ることができないので、次はいつ見られるのかわかりません。とても貴重な体験でした。

今回の旅行の最高の思い出は、早朝の仏歯寺参拝です。日本に帰る日の早朝、まだ日も昇らない暗いうちから、仏歯寺の開門を待ちました。前日の夕刻に、ツァーで参拝したのですが、その時はどうしても観光客の立場だったと思います。観光客としてではなく、仏教徒としてお参りがしたくて、二人の友人と共に、もう一度仏歯寺に訪れました。

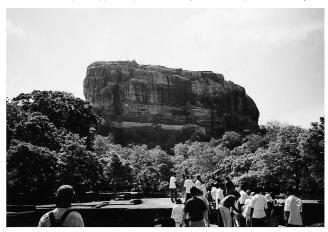
お寺の門前で知り合った女性の家族の案内で、再び 仏歯の部屋の前に行き、蓮の花を供え、その女性達と 同じようにお参りをしました。

二人の娘さんが乳粥を捧げる姿を見て、お釈迦様に乳粥を捧げたスジャーターの面影を重ねました。その乳粥はまだ温かくて、仏歯の前にお供えするために、女性達が朝早く起きて、心を込めて作ったのでしょう。その乳粥のぬくもりは、スジャーターがお釈迦様に捧げた乳粥と、2500年の時を経ても変わらないものだと思います。

スリランカの人々にとって、お釈迦様の存在は常に 身近にあり、この国にはまだお釈迦様が生きていて、 仏教が生活に根付いていることを知りました。

私はスリランカでお釈迦様に会えたような気がします。

スリランカ旅行を通じて多くの人と出会いましたが、 その出会いはお釈迦様が導いてくれた出会いだと思い ます。縁があれば必ずまた会えると信じています。次 はどこでお釈迦様に会えるのか、とても楽しみです。



シギリアロック

SZI通信

高祖道元禅師750回大遠忌奉賛焼香師拝登報告

駒澤大学学長大谷哲夫先生の高祖道元禅師750回大遠忌奉賛焼香師拝登が、去る8月22日に行われました。先生御自身が当SZIの会員でもあり、また、一時帰国した現ハワイ・マウイ満徳寺国際布教師(SZI事務局員)大谷有為師の御本師様でもあるため、役員有志が、この御法縁に随喜させていただきした。

当日は、奥様、有為師を始め長泰寺の関係者、教区組 寺の諸御寺院、大学の関係者、及び我々役員総勢30名を 超えました。

小松空港からバスに揺られて一路永平寺へ。当SZI事務局長飯島師が添乗員をつとめ、バスの中では大谷先生から本山安居中の思い出などが語られました。門前にて本山随喜中の当SZI事務局員秋央文師を迎え、本山拝登の準備も調う頃には、先生も心を集中しておられるようでした。

諸手続を終え、本山の中へ。焼香師の大谷先生、侍者の 有為師が、不老閣拝問、監院寮点茶等に向かわれる間、随 行は諸堂拝観を行い、妙高台で合流すれば、いよいよ法要 です。

哺時諷経には、かつて駒大にて大谷先生の下で学んだ方も大衆として随喜されたようでしたが、これも多方面にて活躍される先生ならではのことです。先生御自身が「いや、あっという間だった」と仰るように、諷経そのものは、極めて円滑に行われました。記念撮影には南澤監院老師(当会会員)にも入っていただきました。

終わって、一行は宿へ向かいます。バスの中で、大谷先

生による「香語」(『傘松』2002年9月号参照)の解説が行われ、随行の方からは「あれは先生にしか読めない!」と喝采が上がりました。さらに先生からは今回の焼香師のような「希代の勝縁」に巡り会ったことが感慨深げに話され、高祖道元禅師生誕800年から、先生は座長として活躍されましたが、まさに、不思議な縁が重なった焼香師だったのでしょう。

宿では、薬石時に、今回参加した方から各々自己紹介がなされ、特に、長泰寺の関係で参加された竹花もとよさんの踊りは、参加者各自の記憶に深く残ったことではないでしょうか。一行の緊張を全て忘れさせてくれるものでした。

翌日には、大谷先生の『永平の風』で活躍した寂円禅師 開山の宝慶寺に拝登し、九谷を回ると、小松空港から空路 羽田へ。本当にあっという間の二日間でした。

(事務局員・記)



大谷哲夫先生と大谷有為師

第3回夏期大学講座「禅といま」随喜報告

7月30日(火)から8月1日(木)までの3日間、高祖道元禅師七百五十回大遠忌記念 第3回夏期大学講座「禅といま」(会場:東京グランドホテル 主催:大本山永平寺 後援:大本山總持寺・曹洞宗宗務庁・朝日新聞社)が、各日300人以上の参加者が集まる大盛況の内に開催されました。今回、私は会場案内係として随喜させて頂きました。これまでもSZIでは、本講座に対して第1回(一昨年)、第2回(昨年)と人的協力をして参りましたが、私自身は初参加でありました。しかし大遠忌奉修は本年まで。今回はSZIとしては最後、私にとっては唯一の随喜となるものでした。

今回の夏期大学講座、3日間の演題と講師の先生方は、「禅と念仏―現代人にとっての意義―」大村英昭先生(大阪大学名誉教授)、「道元禅師の仏道に学ぶ」楢崎通元老師(瑞應寺堂長・永平寺顧問)、「限りない宇宙の中で全てが禅」アナ・マリア・クリスティーナ氏(クラシックダンサー)、「茶と禅―静かな心を育む―」田中仙翁先生(大日本茶道学会会長)、「文明の危機と禅」奈良康明先生(曹洞宗総合研究センター所長)、「永平寺の生活③」小倉玄照先生(元大本山永平寺講師)という、たいへん多彩な顔触れと内

容でした(講義順、敬称・肩書は当日資料参照)。中でも 会場全体が異常な熱気に包まれたのは、アナ・マリア・クリ スティーナ氏のご講義でした。

ドイツ生まれの氏は舞踏家、音楽家、セラピスト等の様々な顔を持つ多芸多才な方で、人間の"繊細な感覚"と向き合いながらも生きる力に溢れた方でした。講義は脳天から飛び抜ける様な笑い声に始まり、舞台狭しと踊り続ける姿に誰もが圧倒され、話者と聴衆の垣根を取り払おうとする氏の姿勢に、会場全体が一つとなって呼応しました。時に体を動かし、時に心を落ち着かせ、氏に漲る"生きる力"を存分に受けた講義となりました。

後日、受講された方から寄せられたアンケートを見せて頂きましたところ、「遠忌が終わってもこの講座は続けて欲しい」という意見が大変多く見られました。冒頭の如く私は、今回の夏期大学講座を「最後の随喜」だと思いながら勤めさせて頂きました。でも今は、「来年以降も開催されないだろうか」という個人的な淡い期待があることをお伝えして、本報告を終えたいと思います。

(SZI事務局員 太田賢孝)

付 納

◆SZI会費納入者

新規会員並びに会員ご継続 ありがとうございました。 (敬称略•順不同) 2002年5月1日 ~2002年11月1日まで

赤間直道 龍角寺 仙台市 秋央文 世田谷区 浅井宣亮 大府市 地蔵寺 荒井禮-深谷市 昌福寺 飯田光照 新宿区 全長寺 石井和泉 大田原市 玄性寺 石月聰明 郡山市 長泉寺 磯貝昌隆 文京区 喜運寺 市川智彬 横浜市 興禅寺 市川明雄 府中市 観音寺 伊藤仁志 安房郡 瑞岩寺 今井亮修 福島県 東照寺 岩本英男 横浜市 上村映雄 中野区 保善寺 一宮市 禅林寺 鵜飼宏史 オーシャントラベル 豊島区 大谷哲夫 新宿区 長泰寺 大場堅司 品川区 大森篤史 埼玉県 東栄寺 中野区 天徳院内 大藪芙美子 小笠原隆元 広沢寺 松本市 垣内善勝 葛飾区 萬福寺 柿沼仁法 行田市 龍泉寺 坂戸市 勝山星悟 金田諦典 栗原郡 通大寺 加納博人 愛知県 天徳寺 亀野哲也 横浜市 貞昌院 川橋範子 豊田市 菊泉寺 名古屋市 楠俊道 耶麻郡 長照寺 豊島区 高岩寺 来馬規雄 豊島区 清巌寺 来馬宗憲 榑林津龍 世田谷区 真竜庵 黒川浩治 板橋区 江戸川区 黒木 靖 黒田俊雄 栃木県 光真寺 黒田泰弘 大田原市 小泉悟道 川口市 円通寺 宮城県 小島孝尋 大雄寺 児玉重夫 千葉市 宗胤寺 島根県 佐瀬道淳 松源寺 西多摩郡 周慶院 佐藤黙童 千葉県 佐藤信嗣 西白河郡 宍戸由布子 善通寺内 柴田隆全 名古屋市 神蔵寺 俊朝寺 港区 昌雲寺 伊勢崎市 秋田市 乗福寺 横浜市 随流院 栖川隆道 大阪府 妙壽寺 寿松木宏毅 平鹿郡 永泉寺 鈴木包-焼津市 林叟院

関光禅 石夢工房 高橋秀雄 館源峯 田中芳周 田中良昭 田村優子 十居孝童 続道雄 つぼた書店 東光寺 東昌寺 栃掘真英

仲井章史 板橋区 長尾龍心 野付郡 中野東禅 横浜市 奈良康明 台東区 成田大航 京都府 西沢応人 豊島区 JTB本社. 台東区 野口弘龍 長谷川崇信 西白河郡 豊島区 籏本宏昌 葉貫成吾 福島県 馬場義実 横浜市 林辰哉 足柄上郡 原田道-岐阜県 原山浩昭 長野県 平子興世 群馬県 廣田賢也 行田市 福島伸悦 行田市 福島BS観光 郡山市 福泉寺 横浜市 福田恵文 台東区 細川皓代 京都市 前田宥全 港区 満友寺 秋田県 群馬県 峯岸正典 村上直文 北海道 森嶺雄 埼玉県 森田英仁 千葉市 安野正樹 羽生市 柳周峰 川崎市 山喜光明 川口市 山崎季晟 三島市 山田茂雄 横浜市 山本健善 世田谷区 横山敏明 横浜市 吉岡棟憲 福島市 竜華院 沼田市 渡辺禅悦 山形県 岡部雅明 富岡市 長禅寺 本荘市 難波真-鶴岡市 菅原敬州 宮城県 中央寺 札幌市 石田征史 横浜市 飯島誠之 静岡県 松月院 板橋区

八千代市 観音寺 港区 北埼玉郡 広徳寺 東大和市 浄仙寺 杉並区 観泉寺 港区 岩手県 宝積寺 喜多郡 瑞林寺 台東区 玉宗寺 福井県 山形県 埼玉県 平塚市 浄心寺 増福寺 長福寺 法清寺 円覚寺 祥雲寺 福壽院 常在院 泰宗寺 石雲寺内 倫勝寺 延命寺 正宗寺 苔翁寺 桂昌寺 嶺雲寺 興徳寺 東禅寺 宗仙寺 正山寺 長楽寺 禅昌寺 松林寺 建福寺 全竜寺

金剛寺 宗徳院 西有寺 円通寺 清林寺 城国寺 永明寺 秀源寺 先照寺 静岡県 天草郡 芳證寺 村上和光 横山信吉 横浜市 四季社 豊島区 東北福祉大学 豊島区 安達良元 冷泉寺 清水市 皓台寺 長崎市 松屋寺 蔵山光堂 大分県 愛知学院大学 青原寺 愛知県

◆SZI特別寄付者

ご寄付ありがとうございました。 (敬称略•順不同) 2002年5月1日 ~2002年11月1日まで

鈴木包一 焼津市 林叟院 山喜光明 金剛寺 川口市 松林寺 森嶺雄 埼玉県 皓台寺 長崎市 小島孝尋 大雄寺 宮城県 市川智彬 横浜市 興禅寺

SZI動静報告

2002年5月1日 ~2002年11月30日まで

6月14日 役員会 東京グランドホテル 会報発送作務 6月27日 7月30日 遠忌記念行事 ~8月1日 夏期大学 「禅といま」への協力 東京グランドホテル 会報編集会議 7月30日 8月5日 役員会 東京にて 9月15日 宗務庁主催 曹洞宗国際交流会参加 永平寺 9月22日 大遠忌ハワイ永平寺 参拝団との交流会 品川プリンスホテル 11月7日 役員連絡会 熊谷にて 11月21日 ハワイ布教に関しての 講演会 宮城県曹洞宗青年会 役員連絡会 大船にて 11月22日 「ゆめ観音 I N大船」 11月23日 への協力

大船観音